

## 文化の狭間に生きること

東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻

モハッラミプール・ザヘラ

飛行機から降りると、カラッとした懐かしい空気が鼻を通る。閑散とした空港の荷物受取所に着いて辺りを見回すと、ガラス越しに手を振ってくれる父の姿が目に入った。その瞬間、ようやく故郷に帰ったという実感が湧いてきた。2022年の夏、3年半ぶりに出身地のテヘランに一時帰国したのであった。日本に留学してから9年が経つが、コロナ禍がやってくるまで、1年か1年半のペースで一時帰国するようにはしていた。しかし、2020年の2月に予約していたフライトがコロナの感染拡大の影響でキャンセルになり、それ以来日本から出られないでいた。

今回の一時帰国で印象に残っているのは、研究のために必要な資料を入手しようと、テヘランのとある図書館を訪れた時の経験である。まず図書館に入って、有効期限が切れていた利用証を更新し、ロッカー・ルームへ進んだが、ロッカーの使い方が分からない。説明書きがどこかにあるはずだと思って探していたところ、突然横から聞こえた思いがけない声に驚いてしまった。

「初めてですか？」

「あ、はい…」

「あそこにある機械を使わないといけませんよ。一緒に行きましょう。やり方を教えますね。」

「あ、ありがとうございます。」

ロッカー・ルームにいた大学院生らしき女性に助けられたのであった。どこにでも説明書きがあるのは、日本での常識だったと気付かされる。カバンをロッカーに入れて一息つき、検索性のパソコンがあるホールに向かった。とりあえず一つのパソコンを選び、検索しようとしたが、うまくいかない。周りを見渡していたところ、少し離れているパソコンの前にいた女性に声をかけられた。

「使い方、大丈夫ですか。」

「いや、あの… 久しぶりに来たので、うまく検索できないのですが…」

「一緒にやりましょうか。」

「え？いや… あの… あ…ありがとうございます。」

「まずはここをクリックしてみてください。」

結局その女性は、私が必要な雑誌を見つけて、利用申請するまで付き合ってくれた。その後、なんとか閲覧室にたどり着き、受付のおじさんに資料の受け取り方を尋ねたが、システムに問題があり、時間がかかるとのこと。仕方なく閲覧室にある20世紀初頭の新聞を広げて読みはじめ、時間が経つのを忘れる。この間、受付のおじさんは待っている私を気にかけて、何度か話しかけてくれた。資料が用意された時には、1時間以上も過ぎていた。おじさんは、私を別の席に案内しこう言った。

「こんなにも待たせて申し訳ない。本当はスマホで写真を撮るのはだめだけど、今日は待たせたお詫びに、スマホで必要な個所の写真を撮ってもいいよ。」

「え？… ありがとうございます。」

お礼を言って、ポケットからスマホを取り出した。日本の図書館ではこれほど待たされたことはない。とはいえ、このように柔軟にルールを変更するような対応を受けた記憶もないかもしれない。

次の日は、別の資料室に行って、資料を申し込んだ。すでにスキャンがある資料は、USB メモリに入れてくれるとのことだった。日本で使っている USB メモリを担当者に渡したところ、彼はファイル名が漢字になっているのに気づいてこう言った。

「中国で勉強しているんですか。それとも日本ですか。」

「日本です。」

「字が本当に難しそうですね。もう全部読めるんですか。」

会話は自然と数分間続いた。日本では調査先の図書館で、このような何気ない会話をする機会が少なかったことを思い出した。おそらく、図書館の担当者が USB に入っている研究者の個人的なファイルを目にしたとしても、それについて相手に質問することはあまり考えられないだろう。

改めてこのような経験を振り返ると、日本で勉強し働くことを選択した自分は、文化の狭間に生きているように感じる。両国の文化を行き来しながらさまざまなコミュニケーションを重ね、社会の規範に沿って「自然」に振る舞おうとするが、それが周りの人に「不自然」や「滑稽」に映る場合もある。時には、「自然」と「不自然」の境界線さえも曖昧になってくる。一時帰国をする時は、長年故郷を離れていて、もう常識がわからなくなってしまったような感覚を覚える日もあれば、一日も離れていなかったような、ずっとそこにいたかのような錯覚に陥る日もある。文化の狭間に生きることは、ぎこちなく不安定でありながらも、何度も発見を繰り返す機会を作ってくれている。